

エルフ転生(仮)

ホタルイカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、主人公は幼女を守って死んでしまいました。けれど、神様に言われて異世界に転生することになりました。転生して目が覚めると、姿がプロトマーリン（の容姿をした一般エルフ）になっていましたとき。

??この小説は読み専であった作者が、プロトマーリンのメス堕ち小説が読みてえなあと思つた結果執筆開始まで至つた小説です。この作品が処女作なので文章構成などはお察しレベルであり、更新も頑張つてみますが不定期です。それでもよろしい方ならどうぞ。

目次

設定	
世界観設定	1
転生者設定	5
転生	
転生前	9
転生する、とは	12
転生…して?	16
TTTI（転生者の為に作られたイン ターネット）内のある掲示板	20
新しき世界について	25
はよメス堕ちしろ	30
王都受付	33
思ったよりも	38
チャオ!	44
動き出した展開	49
TTTI内掲示板とあるスレ	52
不穏の影	58
邂逅に次ぐ邂逅	61
戦闘	64
誰が彼を奪ったのか	70
誇り高き転生者はなにを思うのか	74
Mに手を出すな／転生者の集い	78
世界の破壊者	82

飛ばされた先は

—

88

スゴイジダイ動き出す世界

—

92

オオンアオン（咽び泣き）

—

97

設定

世界観設定

異世界物小説設定

主人公

前世

17歳 高校生

男

中肉中背

何事にも興味ないだらけた、飽きっぽい性格

特別親しい友人もおらず、特定の趣味も無い

転生後

20歳

女

エルフの美少女（プロトマーリンそのまま。能力はその範疇ではない）

基本の性格は変わっていないが、異世界に来た事で現代日本では体験出来ないことや

興味を持てるものを探そうとしている。

同じ異世界に姿形が変わって転生した転生者仲間と程々の友好関係を持つ
エルフという種族について

基本なろう系の世界観のエルフ。多くは森で暮らしてる。

20歳までに身体的な成長を遂げ、そこで成長が止まり後は死ぬまで容姿は変わら
ない。平均的なエルフの寿命は250〜1000歳ほど。寿命が極端なのは、寿命が短い
種族の友人などを先に亡くして絶望し、後追いするエルフも少なくないから。人が死ぬ
のは忘れられた時さ……！（名医並感）

種族特性については、魔術、呪術、弓術などが得意な傾向。プライドが高く、他種族
を排斥し、エルフだけで固まってグループを組んでいる場合も多くある……。のだが、最
近になって転生者が異世界に増えてきた影響で他種族間で交流が増え、以前ほどは排他
的ではなくなった。

異世界の設定

基本なろう系の以下略

中世ヨーロッパ風味は残っているが、都市部は転生者の流入によって近代化が進んで
おり、20世紀前半位にはなつて来ている。

魔力と呼ばれる科学とは違う概念が存在しており、それらは異世界人は大なり小なり

体内に存在している。それを作り出す内臓もある。空気中にも魔力は存在しており、一般的にエルフが他種族より魔術が得意とされているのは、体内で魔力を作り出す他、空気中からの魔力の吸収も出来るため。その為体内の魔力の回復率が段違いで早い。

魔術や呪術等は魔力を体内から触媒を介して外へ排出し、それをもつて術を行使する。

魔力は基本何物にも形を変える。術者の技術だったり、込めた魔力の質・量にもよる。だが一度固定された魔力は他の物に変換出来ない。例えば、魔力で黄金を造ったとしても、それは魔力の塊なので、その黄金を用いてアクセサリを作ったり金メダルを作ったりはできない。でも実際にある物に対して魔力を込めたりなどとその後その魔力を用いて色々出来る。

他種族について

一般的な異世界物の種族なら大体いる。ドワーフ、各動物の獣人から、サキユバスなどの種族も少数ながらいる。ヒューマンも勿論いて、人口が1番多い。

種族間の軋轢も勿論あり、ドワーフとエルフはそれぞれがみ合っている。

宗教について

世界的に広く信仰されているのは白教と呼ばれる一神教

唯一神とその神の使いを信仰している。世界的に5割ほどの人々が信仰していて、緩

和的な規律と教えをもって人々の文化の一部として広まっている。

他多神教や、地域の一部に地元の神を信仰する人々に分かれている。ダークソウルが好きなのでその弊害です。たぶんあんまり使わない設定

国について

殆どの国が未だに絶対君主制。宗教を第一とする国もあるし、共和制の国もある。多民族な国家もありながら、単一民族の国家もあり、もちろん大小の国がひしめき合っている。

アノールロンド王国は世界の中でも随一の歴史、科学、文化力を持つ。それは、早くから転生者を取り込み、その技術を吸収してきたからに他ならない。

大陸はいくつか存在するが、アノールロンド王国はその中でも現実におけるフランスの辺りに存在する。

転生者設定

今のところ観測された転生者

カッコ内は出典

・海東大樹（仮面ライダーディケイド）

仮面ライダーディケイドから出典。能力としては、高速移動、時止め、未来ノート。それと仮面ライダーディエンドへの変身能力とそれに付随するライダー召喚能力。

主人公に一番最初に接触した人物で、親戚の子供を見ているかのような心境。

・桐生戦兎（仮面ライダービルド）

仮面ライダービルドからの出典。天才物理学者としての才能を遺憾無く発揮し異世界に來ても何かしら研究しているらしい。

・万丈龍我（仮面ライダービルド）

同じく仮面ライダービルドからの出典。バカではあるものの身体そのもののスペースは健在であり異世界でも遺憾無く発揮している。

基本的に戦兎の付き添いをしたりして

・マスター（仮面ライダービルド）

仮面ライダービルドにおける諸悪の根源であったり全ての元凶であったり親の仇であったり推しの親であったり正体がバレるまで主人公達とオーブニングで仲良くしたり主人公を鼓舞したりコーヒーが不味かったりする事はない善良な転生者。

転生前からの夢であったカフェ経営の夢を叶えたとかいう設定があったりなかったりする人。綺麗な嫁さんと娘がいる

・照井竜（仮面ライダーW）

仮面ライダーWからの出典。あまり設定が固まっていない

・アリーゼ・ローヴェル（ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか）
ダンまちからの出典。

筆者の死んでほしくなかった人NO. 1。詳しくはダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか アストレア・ファミリア でチェックだ。

個人的に2次創作って原作死亡キャラ生存させたりする展開が1番好き。

他

・転生者用インターネットを作った転生者（???）

大概固まっている

・万華鏡写輪眼を持つ転生者（NARUTO?）

特になし

転生者の設定

プーリンが転生した時点で結構な数の転生者が存在している。法の整備だったり食料自給率だったり未発達・不十分なままではあるが、転生者同士が活発に活動し、地方と都市部の格差問題や現代における知事的立場を担っている貴族の汚職などは減りつつある。

しかしこれは貴族と転生者達の関係に溝を深めることにも繋がる。

転生者にも様々な考えを持って動いている者達があり、

異世界の政治や軍事、技術開発にあまり関わるべきではないのではないか、という考え。
え。

ガンガン関わって技術なども発達させ、現代に近い感じにしようぜ、という考え。

ほどほどに関わってゆったりとした技術進歩を見守ろう、という考え。

その他過激なものから穏健なもののお考えまで大丈別れる。

後先考えず俺TUEEEEしようとしたものも過去にはいたにはいたが、先輩転生者様方にコトを起こす前に再教育された。

プーリンが転生する以前は、転生者は転生する時に自身で転生特典を選ぶ事が出来

た。

その際、転生者は無意識のうちに自身の魂に近い物を特典として選ぶ傾向がある。その為、性転換する転生者もいるにはいたが、大変希少であった。

転生

転生前

退屈だ。そう考えない日は無いと思う。毎日毎日同じことの繰り返しで、現実には飽き飽きしてきた。今では顔も覚えてない中学の時の友達や、高校に入ってから少なからず交流のある友人にならってアニメや漫画、小説とかも沢山読んで、長続きはしなかった。今でもたまに読むことはあるけど、もうそれだけしか見れない、っていう感じじゃ無い。常に退屈な感情に包まれる。

いつからだろうか。こんなふうになってしまったのは。昔は冒険モノの映画を見て、ヒーローが悪を裁くシーンを見て、感動に打ち震え、悲劇に涙していただろうに。

いつからだろうか。世界が灰色に見えるようになってしまったのは。お宝を目指してジャングルの奥地にも行けず、悪の秘密結社の暗躍を知り弱者を守るヒーローにもなれなかった。

いつもの学校からの下校中、歩きながらそんなことを考える。いつか自分にしか無い能力に目覚めるだろう、隠された才能が目を出さだろうと考えるうちに、こんなところまで来てしまった。なんというか、現実には厳しすぎやしないだろうか。もうちょっと夢

を見させてくれたっていいじゃ無いか。

ふと横断歩道に辿り着く。運のないことに赤信号だったが、いつもの光景に非現実的な光景が目の前に飛び込んできた。

赤信号の横断歩道に、それを走って渡ろうとする小さい女の子。焦っているのだろうか、ランドセルの蓋は未だ半開きで中の少々汚れた教科書などが溢れかけようとしているが、それに気づいていないらしい。

横を見る

女の子に飛び込んでくる、大型のトラック

身体が 勝手に 動いていた

女の子のランドセルを掴んで、自分のいた方へ女の子もろとも投げる。投げ飛ばした反動で変り身と言わんばかりに横断歩道に飛び込んでいく自分の身体。散乱する中身と、無事歩道へ投げ飛ばされたらしい女の子。中身については命は助かると思うからどうか安いモノだと勘弁して欲しい。

大型トラックに轢かれると思った瞬間、意識が飛んだ。

.....

目が覚めて、周りを見渡すと、そこは白い空間だった。四方八方を見ても果てがないように見える。しかし、近くに社長机みたいなテーブルと付随する椅子、そして顔にモ

ヤのかかった謎の人物が椅子に座っていた。

「やあ、目が覚めた？」

その人物が落ち着いた様子で話しかけてくる。

「：． あの、ここは何処でしょうか。なんで僕はここにいるんですか。」

確かに僕はあの時死んだと思っただし、死んだはずだ。女の子を救って。

転生する、とは

「…… ということなんだけど、理解出来たかな。」

「…… まあ、大体は、ですけど」

まあ座ってよ、と言われたので、置いてあった椅子に座って。

この空間に来てから、謎の人物に今の僕の現状について色々教えてもらった。

僕はどうかやら、女の子を助けた代わりに命を落としたらしい。どうしてあんなことをしたのかは僕にも分からないけど、助かった命があったのなら、まあ、良いんじゃないかと思う。

「それで君の扱いなんだけど、異世界、興味無い？」

「…… 異世界ですか？」

「そう、異世界。ライトノベルとかに出てくる、エルフとか、魔法とかがある世界。」

謎の人物が書類みたいな紙束をペラペラと見ながら、問いかけてくる。

異世界、これは、異世界転生という奴なのでは？ 中学の友達から借りて読んだ小説に出てきた設定だ。何かを庇ってトラックに轢かれた主人公が、実は死ぬ筈じゃなくて、お詫びとして特典とか貰って異世界でチートハーレムを築くっていう……。

「その、特典とか貰えるんですか？」

「特典？貰えるよ。でも、こちらが選んだ、その人に合った能力とかだけだね。以前までは転生者側にも選んでもらってただけだけど、身の丈に合わない能力を選んじやって、向こう側で暴走して迷惑かけちゃったんだ。」

自分では選べないというのは、結構ギャンブル性が高いように感じるけど。

「まあでも、その人の本質とかに合ったモノをプレゼントするから、悪いようにはならないぜ？」

僕の本質、か。死ぬ前は退屈で退屈で、このまま何もせずに死んでいくのかな、なんて思ってたけど・・・

「で？どうする？転生する？」

「・・・一つ、聞きたいんですけど。」

「なんだい？」

「異世界って、楽しいですか？」

きつと心躍る冒険や、運命的な出会いと別れもあるんだろう。

「・・・ああ、きつと満足すると思うよ。」

次の世界では、出来なかつた事をやっていこう。

.....

謎の人物は、じゃあ色々と処理あるから、椅子に座ってゆっくりしてて。と言つて突然出現したドアを通つて何処かへ行つてしまった。

：．．． あの人つて一体何者なんだ？神？存在X的な．．．？

僕が本来死んでいる筈で、でもここにいてるつてことは、それを為したあの人はきつと理外の存在なんだろう。ということとで考えるのをやめた。．．． もうちよつと恭しい態度だった方が良かったかもしれない、と少し反省した。

少しして、あの人が帰つてきた。

「はい、じゃあ処理も終わったので、能力とか付与して向こうに送りたいと思います。送られるまではまだ時間あるから、それまでに身体慣らしといてね？」

身体を慣らすつていうのは、能力を使いこなせつて意味なのだろうか？でもこんな所で水噴射とか、火遊びとかして良いんだらうか？

「あつ、付与される能力つて、何も火を出したりするだけじゃ無いんだぜ？個人の適正とかによつては女の子になつたりもするんだから。」

え？ちよつと待つてそんなの聞いてないんですけど

「まさか．．．」

ニタリと、嫌な笑顔を浮かべる謎の人

「そう、そのまさかだ。君には女の子になつてもらおう！向こうでは女の子として冒険出会い挑戦そして恋愛諸々！頑張ってくれたまえ！」

ちよつと待っ——

転生... して?

再び目が覚めて、周りを見渡すと。なんとも形容し難い、謎の空間に飛ばされたことがわかった。そして自身の身体に目を向けて見ると、白魚のような美しく儂く、そして頼りない女の子の... ような... 手...

「ええええっ!!」

やはり女の子にされてしまったらしい...
...
...

ふんわりと波打つ白髪、ピンと反り立つ耳、男の時では考えられない程細く美しく頼りない腕、脚、身体... そして、少しだけ、控えめだけれど女性であることはハッキリと分かるほどに膨らんだ胸元...

顔は未だに見れないけど、触った感じからして、きつと美形だろう。

「なんてことを...」

いつの間にか手に持っていた杖?を支えにヨロヨロと床に座り込む。こんな、こんなことって...

<<気は済んだかい?>>

驚いてビクツツとしてしまった。誰の声だ?どこから聞こえる?この声は一体…

<<酷いなあ、君のその身体だって、元は僕だったのに>>

この身体、ということは、この身体には元の持ち主が居たつていうことなのだろうか?
?

<<まあ、勝手に身体を複製された事に思う所は有るけどね。でもまあ、良いだろう。せいぜい来世を楽しみたまえ、君達は儂く死ぬ運命にあるからね。その身体を使って、頑張つてハッピーエンドを見せてくれよ?>>

身体が霞と化していく。何処かに飛ばされるのであろうということが、実感をもってなんとなくわかった。

ちよつと待つて下さい、まだ現状も飲み込めて無いのに!貴方の事も、この身体の事も!そもそもこれは――

.....

再び、またもや。目が覚めると、そこは草原だった。天気の良い雲一つない空、涼しい風にたなびく草花が広がっている。近くには緩やかな流れの川が流れている。水の

反射で自身の顔を確認する事が出来るだろう。

屈み込んで、顔を見てみた。

「...!!何というか、美しい、という言葉では表せない。傾国の美女、とか言うけど、

そんなレベルでは無い気がする。あるいは人外的な魅力で、人を惹きつける...」

あまり人に顔を見られてはまずいと思つて、服についていたパーカーを深くかぶる事にした。

この長い耳からして、異世界におけるエルフ、という種族なんだろう。小説で読んだ事があつたし、そんな感じの描写だつた気がする。

しかし、困つたなあ。この世界に関する知識を何一つ教えてもらつてない。下手したら餓死とか、するかも...それにこの身体的能力についても教えてもらつてないし。

そんな事を考えていたら、遠くから人影が近づいて来た。

それは、遠い死ぬ前の記憶で見た事がある気がする、真剣に見たことは無いけどとても人気だつたジャンル。

「... 仮面ライダー?」

いつの作品のライダーかは分からない。けど、確かに見た事がある特徴的なライダー。仮面ライダーディケイドに出てくる、青色の...」

「やあ、君が今回の転生者君かい?」

「僕の名前は海東大樹。またの名を、仮面ライダーディエンドさ。」

TTTI (転生者の為に作られたインターネット) 内のとある掲示板

【朗報】 転生者、増える 【悲報?】

1 : 名無しの転生者 ID : ****
どうするよ

2 : 名無しの転生者 ID : ****
やべえよ... やべえよ...

3 : 名無しの転生者 ID : ****
どうするも何も誰かが確認いくしかないっしょ

4 : 名無しの転生者 ID : ****
転生者が増えたって事は例の暴走クソ野郎の件が許されたってことじゃないの?

5 : 名無しの転生者 ID : ****
あいつが暴れたせいでこっちの神と向こうの神で色々あつたらしいっすね

6 : 名無しの転生者 ID : ****
あーいう考えなしの馬鹿が現地の民と転生者の仲を悪くするんだよなあ

7 : 名無しの転生者 ID : ****
 いやむしろ今までの転生者が問題起こしてないのは異常だと思うよ。いつどんな奴が来てもおかしくなかった

8 : 名無しの転生者 ID : ****
 てか転生の神ちゃんを選定したんすかね。どう考えてもまともな奴じゃなかったっしょ

9 : 名無しの転生者 ID : ****
 まさか力に溺れて王都を焼くとはこのリハクの目をもつてしても

10 : 名無しの転生者 ID : ****
 >>9

もともと無能定期

11 : 名無しの転生者 ID : ****
 アレのせいで一時期転生者への抑圧とか規制条例とか敷かれそうになったもんなあ。王様がまともな人で良かった

12 : 名無しの転生者 ID : ****
 どう? 現場。復興出来そう?

13 : 名無しの転生者 ID : ****

んにやび：． んまあそう、そうつすね。王都の転生者が多数協力してくれたおかげで無事工期には間に合いそうです。転生者ニキネキ達、ありがとナス！

14：名無しの転生者 ID：*****

なお王都民との仲はあまり復興出来てない模様

15：名無しの転生者 ID：*****

つい1年か半年かくらい前まではニコニコ笑顔見せてくれてた花屋のロリがマツマに連れられて明らかにワイイから遠ざけられる悲しさよ

16：名無しの転生者 ID：*****

かなC

107：名無しの転生者 ID：*****

話戻しますけど、どうするんです？接触するんですか？

108：名無しの転生者 ID：*****

した方が良さしょ。下手に現地民と先に会ってギスギスするくらいなら私らが保護か捕縛した方がいいでしょう

109：名無しの転生者 ID：*****
 戦闘力あるやつ、いる？それでいて会話出来る奴

110：名無しの転生者 ID：*****
 ノ ワイスーパー野菜人

111：名無しの転生者 ID：*****
 ノ 正義の味方

112：名無しの転生者 ID：*****
 おれがガンダムだ

113：名無しの転生者 ID：*****
 仮面ライダーだよ

114：名無しの転生者 ID：*****
 このメンツの中でマシなのってどれだよ

115：名無しの転生者 ID：*****
 存外マシなの集まってるな…

116：名無しの転生者 ID：*****
 近いやつがいけや



新しき世界について

仮面ライダーディエンド。ディエンド、はともかくとして。仮面ライダー、という単語は聞いたことがある。前世において子供から大人まで幅広い世代に人気のあった特撮シリーズのうちの一つ。

けど、なんでそんな存在がよりにもよってこの異世界に？

「君は、現状君という存在がどんなものか分かっているかい？」

「…いきなりなんです？」

「いやなに、君がおかれている状況を説明されているかなって。ほらいただろう？ 転生してくる時に、神様っぽいのがさ」

仮面ライダー、という存在を名乗る仮面の男がそんな事を聞いて来る。

転生という言葉を用いてくるということ、この男も転生者なのだろうか？ そもそもおかれている状況とは？ この異世界では哲学について考えなきゃいけないのか？

「貴方も転生者なんですか？」

仮面の男改め海東大樹、を名乗る男が手に持つ銃をくるくると回転させ、手元で遊んでいる。

「うん。僕も転生者のうちの一人さ。それで、君はどうなんだい？そんな事を聞いてくるってことは、君もそうなんだろう。さっきの話んだけど、異世界での転生者について、何も話を聞いていないのかな？」

僕は、海東さんに死んでから今までの過程と、聞いた事を全て話す事にした。

—— 全て話し終えて

こんな所はずっといるのもなんだろうから、と言われて僕達は、海東さんに先導されて近くにあるという街に歩きながら話をする事にした。

僕からの話を聞いて、どうやら危険性は無いようだから、と海東さんは持っていた銃をスライドさせ、中に入っていたカードらしきものを抜き取った。その時、残像のようなものが四方八方に飛び散ったように見えた。

すると変身が解け、代わりに長身の男が出てきた。白いコートのようなものを着て、十字のキーネックレスをしている、金髪の男。これがあの仮面ライダーの本体らしい。

僕が最後に仮面ライダーを視聴した時は黒髪だった気がするが、記憶違いなのだろう。あまり覚えていないし。というか銃というには色が派手すぎやしないだろうか？

「ふーん、なるほどね。あまりこちらの世界の状況は説明されてないようだ。良いだろう、ちよつと聴きたまえ。」

海東さんはそういうと、この異世界の現状について話し出した。

この世界は今、転生者というものをどのように扱うか、という事に関して敏感になっているらしい。

僕が転生してくるおよそ半年前、1人の転生者が自身が転生特典として得た力に溺れ、それは盛大に暴れたそうだ。異世界にある国家のうちの一つの王都、その一区画を破壊し壊滅状態にした。同じ転生者達によって暴走は止められ、幸いな事に死者は出なかつたものの。重軽傷者多数、建物破壊によって住めなくなつた人々大勢、転生者へと複雑な感情持つものたくさん。といった感じになつた、らしい。

「なんでそんな事をしたかつて本人に聞いたら、飲み屋の女性店員が自分の相手をしなかつたから、だつてさ。笑つてしまふだろう？」

「それは：：なんともふざけた話ですね。」

おそらく力を得た事で、自尊心が暴走し、自分の思い通りに事が運ばなくなつた事に不満を抱いたのだろう。ゲームのように、異世界というものを自分の好きなように出来ると思つたのだろう。

そんなくだらない理由で僕達に被害が出るのは勘弁してほしいがね、と海東さんは苦笑いで付け足した。

「兎にも角にも、僕達、以前から異世界にいる転生者は、これ以上『転生者』という存在

が異世界の人々に悪い印象を与えるのを止める必要があるんだ。」

だからわざわざ僕の事を確認してきたのか。危険性がないか、確認する為に。

「どうやら、転生の神側でも対策はしてくれているようだね。もしかしたら以前のよう
に無作為に転生するものを選ぶ、というのも辞めて選別とかもしているのかもしれない。
」

少し安心した様子でそんな事を言う海東さん。この世界でも長く生活しているのだ
ろう、それなのに1人のバカによつて安寧が崩れたとしたら、たまったものではないだ
ろう。それに、転生者も複数いるらしい。異世界というもとの世界の常識が通用しない
世界で、仲間がいるというのは、これほど頼もしいものはないだろう。

side. 海東大樹

やあ、僕の名前は海東大樹、通りすがりの仮面ライダー、それを追うものさ。…なん
て名乗ってるけど、僕はその実本編の海東からは乖離した存在だね。お宝への興味も無
いし、男の尻を追いかける趣味もない。

最初僕が転生する事になった時、転生特典を選べ、なんて言われてね。どうしたもの
かと考えたんだ。そこで思いついたのが、仮面ライダーディエンドさ。昔から仮面ライ

ダーが好きだったのもあるけど、仲間を召喚出来るんだぜ？これ程頼もしいことはないだろう。異世界という慣れない環境ならば、自身の身を守る存在は多いに越したことはないさ。

はよメス墮ちしろ

第7話

草原を抜けて、人の通りがあるのがわかる、道路に出た。もちろんコンクリートとまではいかなかったけど、石やレンガみたいな素材で出来た、近代的な道だ。その道に沿って東に行くと、目的地となる王都に着くらしい。整備された道に辿り着くまで結構歩いた気もするけど、疲労感も無く息切れなども無い。この身体は案外丈夫なのかも。

その間、僕と海東さんは街に着くまで色んな話を話した。

前世の事、この体の事、西暦何年から来たのかとか、どんな転生者がいるのかとか。この身体の持ち主の名前は、マーリン。しかもその別作品に登場する、プロトマーリンと呼ばれる存在らしい。あの時話しかけてきたのが、おそらくプロトマーリンなのだろう。なんだが改めて元の身体の持ち主？というのだろうか、そういった存在を知ると、勝手に弄ったりするのも申し訳なく感じる。

……そもそも性別が違うのだし、女の子の身体を弄るといのは……いや、でも、自分の身体として付き合って行くんだし……

そんなふうに悩んで、うんうんと一人頭を抱えていたら海東さんが、

「まあまあ、その身体に君の意識が入った時点で、その身体は君の物だ。その身体をどうするのも君の勝手だし、どのみちこの先長い人生、付き合っていかなければならないのはわかってるだろう?」

「今すぐ慣れろって言っているわけでもない。そんなこと言う権利、僕にも、転生させた神にも無いしね。ようは慣れさ。慣れ。」

「君は特に特殊な例だろうね。性別が反転したのは転生者の中にも1人、2人、……いや、案外いるようだけど。先輩転生者の彼、いや彼女らにアドバイスをもらいたまえ。紹介してあげよう。」

海東さんは案外面倒見が良いようだ。転生者という共通点しか無いのにも関わらず、こんなにもお世話を焼いてくれるなんて。

自分も転生当初お世話になった人達への恩返し、なんて言ってるけど、それを実践出来る人は案外少ない。

自分とはとりあえず、この身体の名前である、マーリン、という名前を名乗る事にした。海東さんがいには、彼の知ってるマーリンとはかなり違うみたいなのだが。雰囲気などは似てる程度、らしい。足元に花が咲いていたり、胡散臭かったり、本来のマーリン

はするらしいのだが。

…… 足元に花つてなんだよ。歩き辛く無いのだろうか。まあ、人外だったらしいし、人の理解を超えた先にいるのだろうか。

海東さんは魔術とかそういうのはあんまり精通してなくて、この世界の魔術はある程度わかる程度。ほとんど仮面ライダーディエンドの能力で片付いてしまおうし、転生者仲間もいるから学ぶ必要が無いらしい。魔術に詳しい仲間も紹介してあげよう。とのこと。

…… 一体何処までお世話になるのだろうか、自分は。正直惚れてしま…… いや自分は男なのだから男に惚れるというのは自己のアイデンティティ的にどう……

なんで事を考えていると、ふいに海東さんが止まった。

「ほら、遂に着いた。見たまえ、転生者の集う街。近代化と文明開花の進むこの世界で一番と行って良い技術の最先端を行く街、大陸の西側に位置するアノール・ロンド王国の誇る王都、ヤーナムさ。」

そう言つて海東さんは街の方を指差す。

…… その名前はちよつと駄目なやつでは？

王都受付

海東さんに先導されて、街の入り口だと思われる大きな門の前に辿り着いた。門の前には街に入ろうとする人々、大きな荷物を乗せている車のようなものも見えた。驚くことに、この世界にも車のようなものがあるらしい。前世という軽トラに1番似ている。けど車にしてはどこか簡易的だし、荷台のところに大きな水晶のようなものが付いている。

「驚いたかい？ あれはこの世界特有の資源である魔石というものを使って動いているんだ。」

「魔石ですか？」

海東さんが言うには、大気にある魔力が固体化して固まったものらしい。原理とかは詳しくて分からなかったけど、魔石がエネルギーとなって火が点いたり、物を冷やす時にドライアイスのような役割を果たすらしい。

こういったいかにも、っていう異世界要素があると俄然テンションが上がってきた。目をキラキラとさせていたら、海東さんに見られて苦笑いされてしまったけれど。

「じゃあ入国しようか。転生者は転生者用の入国券みたいなものがあるから、並ばなくて良いのは特権なんだよね。」

そうなのか。現地人の人と思われる人達の列を横目に、別の大きな門の横の出入り口。一般入国者用の出入り口隣の扉に入っていく。

中に入ると、カウンターのようなもの、その中で多くの人が忙しそうにあちらこちらへ走っている。前世でいうなら、市役所とかに似ているだろうか。

窓口の前には、軍服に緑色のベレー帽を被った、茶髪をお下げにしている垂れ目の優しそうな雰囲気を持ったお姉さんが忙しなく書類の整理をしていた。入ってきた僕たちには気付いた様子で顔を上げながら問いかけてくる。

「いらっしやいませ……ってあら、海東さん。お早いお帰りですね。何かご用事でもあったんですか?」

「ああ、新しい転生者がやってきたからね。危険が無いか確認しに行ったんだ。ほら、彼女が新しい転生者君だよ。」

海東さんが、後ろにいた僕を受付さんに紹介している。

「あつ、あの、初めまして。マーリンです。」

綺麗な人だなあ、とか思ってたら急に話を振られてテンパってしまった……恥ずかしい。

「…… まあ！今回はまた随分と綺麗な女の子ですね！前回はガチムチの筋肉質な人でしたが…… マーリンさんですね、よろしく願います。」

と、前置きした上で彼女は

「わたくしはアノール・ロンド王国入国管理局、王都ヤーナムの西口転生者用窓口で受付を担当しております、アリアと言います。よろしく願いますね」

人の良い笑顔でニツコリと笑いかけてくる。うつかり惚れそうになるからやめてほしい。そしてぎこちない笑顔しか返せない自分をとことん責めたくなる。

「堅苦しい挨拶はやめて、転生者登録でもしうか。」

海東さんが聞き慣れない事を言ってきた

「転生者登録、ですか？」

「そう、登録。身分証の発行みたいなものだよ。転生、もしくは転移してきたばかりの僕らは、自身の身分を証明するものがないだろう？だからここで作ってもらおうのさ。」

なるほど、そういうことか。

海東さんが言うには、登録証があるだけで無料で宿屋に泊まれたり、公共交通機関にタダ乗り出来たりするらしい。過去に転生してきた転生者達が、国に貢献してくれた事への見返りというのもあるんだけど、僕達後続の転生者達にも国への貢献を期待して発行されているらしい。

「じゃあ名前の記入、年齢性別、その他諸々この書類に書きちやつてくださいね。」

そういつてアリアさんがボードに挟まれた色々書いてある紙と……なんだこれ、シャーペン？異世界にもシャーペンがあるのか、転生者の影響つて凄いなあ。

名前とか、出来る事とか、前世はどんな感じだったのか、とか……性別の欄は苦渋の決断だったけど、身体は女の子だし、女性に丸をうったけど……自身で改めて女性になつたつて認めるのは、なんかモヤモヤするなあ。未だにこの身体で何が出来るのかわからないし、能力欄は未記入でいいか。任意つて書いてあるし。

書類を受け取つたアリアさんが、紙の内容を機械に読み取らせたら、ちよつとだけ機械が光つた。そしたら定期券みたいな券が出てきた。

渡されたソレを見ると、さつき入力した事と、いつ撮つたのか分からない自分の写真が貼つてあつた。

…… やつぱ綺麗だな自分……

「はい、では手続きも終わりましたし、入国を許可します。王都を是非楽しんで下さいね。」

「ありがとうございます。」

アリアさんに頭を下げて、海東さんのところへ向かう。海東さんは、窓口と同じ部屋にあつた待合室みたいところでソファに座つて、雑誌を讀んでいたらしい。異世界に

もあるんだ、雑誌。

「いやいや、こういった手続きは必要だからね。時間がかかればかかるほど、細かいところで問題に巻き込まれなくて済むってものさ。」

そう言つて海東さんは雑誌を元の棚に戻して、僕の方を向く。

読んでいた雑誌は……「週間大陸のお宝　～古代遺跡に眠る伝説の秘宝～」？

なんとも俗世っぽいというか、現代日本っぽいというか。異世界に来て異世界らしさを実感したのつて、案外少ないのでは？本当にここが異世界か疑わしくなってきた。

「さあ、行こうか。転生者が多くいる宿だったり、美味しいレストランや行きつけのカフェを紹介してあげよう。」

そう言つて海東さんは、出口の扉を開けた。

思ったよりも

海東さんに先導されて王都に入ること数分。僕は王都の街並みに感動していた。

中世ヨーロッパのような、けれど美しさと機能性が両立したかのような街並み、石畳の道路、賑わう屋台と行き交う人々。チエコだのプラハだのと例に挙げられる様に、小説やアニメで見たことある……！と再び異世界に來た事実を感動として実感し、受け止める。

一人でに感動していたら、海東さんが裏道に入っていつて、ついてこいと言っている。家と家の間の暗い裏道を抜け、入り組んだ道を海東さんについて行く。

門から王都の中心、王家達が住む城まで続くメインストリートから裏道を抜けて再び別の大通りに案内された先には、多くの人の通りが見られた。

その人混みの中には、

なんと、なんと！エルフやドワーフ、猫耳までいるのだ！まあ僕自身もそのエルフラしきものになってしまったようだが。後なんだろう、ちよいちよい全身真っ白な僕が珍しいのか、所々から視線を感じるが、まあ気にしなくて良いだろう。

「ここは王都で一番賑わっている露店通りだ。質の良いものから、タチの悪いものまで売っている。時たまお宝に巡り合えたりするね。」

独自の言語で描かれているのに読める文字と、その名を指しているのだろう、並んでいる商品を見る。どうやら商品の名前もある程度前世と変わりはないようだ。

特に食べ物や道具などは、転生者の影響をモロに受けているのだから、分かることが分かった。

リンゴやオレンジなど、ぱつと見馴染み深い果物から、赤い外皮と薄い緑色の果肉を持った甘い果実（聞いてみた所、ルイーズという果実らしい）、など違う世界であることを実感させてくれるものまであった。

他にも露店で、魔石と呼ばれる宝石のような物も売られているのを見た。

地面にひかれているいるシートの上に、綺麗な宝石みたいな色とりどりの魔石が並んでいるのを、しゃがみ込んで覗き込む。

「ああ、魔石が気になるのかい？先ほどの車も熱心に見ていたし。良いだろう、試しに一つ買ってあげよう。」

海東さんがしゃがみ込み、青色に光る魔石を一つ選ぶ。店員さんにお金を払って魔石を購入した海東さんは、僕に魔石とは何かを説明してくれた。

「良いかい？マーリン君。この世界にある魔石とは、つまるところ様々なエネルギーに

変換できる電池のようなものだ。」

海東さんは、僕に魔石を見せながら、（そして露店から離れながら）ここうも続ける。

このように色の付いている魔石は、それぞれ別々のエネルギーへと変換出来るのだと。物を冷やしたり、火力発電のように燃やしたり、風を起こす事が出来るのだと。

「なんともまあ、リーズナブルで都合が良くて、環境にも優しいモノなんだろうね。これも神様が人と近い故かな。」

と、海東さんは冗談めかして言う。

先ほどから人混みに紛れて露店を海東さんと観光していて気付いたことがある。

——自分が美人すぎる。

エルフや獣人達にも美人が沢山いた。色白で、鼻が高く目鼻が整ってて、煽情的な衣装を着ている人もいたが。もう一度言う、

——自分が美人すぎる。

一眼見ただけだが、自分が人知を超えた美しさを持っているのが分かる。前世の自分も、もし会っていたら一生忘れられないであろう。

門から王都に入った時点で、海東さんに言われて服に付いていた被り？をしていて良かったと思う。よくよく思い出してみれば、受付に入る前も視線がガンガン来ていたよ

うな……？こんなに賑わう人混みだ、もつと騒ぎになっていたことだろう。海東さん様々だ。

まさか自分の容姿が理由で悩む事になるうとは。美人なのも考えものだなあ……性別の事もあるし、悩み事が増えてしまった。

でもまあ、今はこの露店を楽しもう。

普通の宝石店や屋台のラーメン屋？や、武器屋などを海東さんと見て回って数時間。海東さんがこんなことを言い出した。

「マーリン君、君もそろそろ歩き疲れただろう？オススメのカフェを教えてあげよう。ついてきたまえ。」

そう言った海東さんにつれられて、またまた裏路地を抜けて僕らは小綺麗なカフェに入った。

僕達が今いるのはカフェ「ナシタ」、海東さん一推しの喫茶店らしい。マスターの作るコーヒーが美味しくて気に入ってるんだとか。

落ち着いた雰囲気の内、明るい太陽の光が差し込み、ゆっくりと寛げる感じがする。お客さんは僕達だけってわけじゃなくて、中々繁盛しているようだ。洋風な装飾の店内と、渋くてカッコいいマスターが良い雰囲気を作っている。あつ、投げキッスしてきた。

少々店内は騒がしいが、声が届かないってほどでも無い。ひとまず僕は、マスターに入れてもらったコーヒーを口にする。あつ、美味しい。

僕がコーヒーのカップを置くのを見てから、海東さんが話を切り出す。

「まあひとまず、必要なものが買えるところは紹介したつもりだよ。あとは泊まれる所や、働く場所だね。まあ、無理にとは言わないが、しごとは紹介するだけタダだろう。君はこの世界で知らない事が多過ぎるからね。」

「はい、本当にありがとうございます。何から何まで。本当に」

「いや、良いんだ。先輩転生者として後進にアドバイスするのは当然のことさ。君は少々特殊だからね。」

「性別の事ですか？」

「それもあるがね。転生者と現地人で色々あつて、一時期転生者が送り込まれる事が無くなった。いざ再開した、っていう時の初めての転生者が君さ。気にかけるのも無理は無いつてもものだね。」

そう言つて海東さんはコーヒーを一口、口に含んで再び話す。

「僕らはこの世界で第二の生を得て生き返つた。前世で何があつただろうと、ここでは関係は無いさ。姿形だつて以前とは全く違う者もいる、君のようにね。」

「兎にも角にも、皆ここが心地良いつてことさ。それを壊されたく無いんだ。」

その言葉には実感が籠っていて、心からそう思っているんだろう、と感じた。

「ま、君は性別が変っちゃってるし。悩んでるんだろう？そのことでさ。」

…… 気づかれちゃってたか。

「君はその容姿や性別でこれから苦労していくだろうけど、焦る事はない。まだ先は長いんだ、ゆっくり前へ進んでいけば良いさ。」

色々和海東さんの話を聞いて、心が軽くなつた気がする。自覚してなかったけど、僕が思っていたより、性転換は僕にこたえたのかもしれない。

「ここには先輩転生者もいる、頼りになる人もいる。どんどん頼ってくれ。」

「自分探しの旅とかもオススメだね、僕としては。通りすがりの某つて名乗ってさ。」

チャオ!

海東さんにアドバイスしてもらって、心から気持ちが悪くなったと感じる。本当にこの人には、頭が上がらない。

あの後海東さんが、

「じゃあまず、他の転生者の所へ行こうか。どうするか決めるのも、それからでも遅くはないさ。」

海東さん以外の転生者か……不安だなあ。海東さんが善良だからっていつて、他の人がそうだとに限らないし。

「なんだか不安に感じているね？大丈夫大丈夫、僕と同じ正義の味方、仮面ライダーだからさ。まあクセは多少あるがね。」

そういうと海東さんは急に立ち上がり、僕達が座っていた所から一番離れた、入口からちようど影になる席の方に向かっていく。僕もそれに慌てながらもついて行く。店の中で一番騒がしい所だったのだが、特に気にしてなかった。誰か知り合いが座っているのだろうか？

海東さんは、その席の騒がしい人々の前に立って、声をかけた。

「やあ、久しぶりだね。戦兎くん、龍我くん。相変わらず2人は仲が良いな。」

「別に仲良くなんかしてねえ！…… っってお前！海東！久しぶりだな！ここにいたんなら言えよ！」

「さっきからうるさいんだよ筋肉バカ！静かに飯も…… っつて海東、来たのなら言つてよ！」

「…… 本当に騒がしくて仲が良いね、君達は。」

彼らが座っていた席に移動して、4人で集まって座ったわけだが。

「マーリン君、紹介するよ。僕と同じ、仮面ライダーの特典を貰って転生してきた、転生者仲間の桐生戦兎君と、万丈龍我君だ。仲良くしてくれたまえ。」

前世でチラホラと見た、仮面ライダービルドの主人公達に似ている…… というか、ほぼほぼ本人なんだろう、その身体に宿った魂を除いて。トゥイッターでネタ画像として

使用されているところしか見た事が無いが、愉快な感じの作品だった気がする。

まず茶色のトレンチコートを着ている方の彼、神経質そうな、研究者の様な雰囲気を持つ桐生戦兎を名乗っている。

「やあ、俺の名前は桐生戦兎！愛と平和の為に戦う、仮面ライダーだ！てんっさい物理学者でもある。いつもは研究室に籠ってるんだが、このバカがうるさくて…」

「バカとはなんだ！筋肉をつけろせめて！お前があんなシケくせえとこに籠ってたから連れ出してやったんじゃねえか！カビが生える前で良かったな、感謝しやがれ！

あつ後！俺は万丈龍我っつうんだ、よろしく！」

なんともまあ、個性的な挨拶なんだろうか。クセがあるっていうのもよく分かる。

「はい、お二人ともよろしくお願いします。僕の名前は…マージンと言います。先程転生してきたばかりで何がなんだか…」

桐生さんは僕の言葉を聞いて、心当たりがあるような顔で言う

「なるほど、それじゃああなたが掲示板で噂の新しい転生者ってことか」

掲示板…？なんだそれ？

「アレ海東、説明しなかったのか？異世界って言っても転生者の中ではほぼほぼ現代に近い技術が開発されてるんだぜ？」

掲示板もそのうちのひとつだ、と言って万丈さんはスマホらしきもの（！）の画面を見

せてくれた。

その画面には前世で何度も見た、ネットの世界が広がっていた

昔々いた転生者達が、この世界に転生してきてこう思ったらしい。

「めっちゃ不便じゃね？」

それからは神からもらった転生特典、いわゆるチートと呼ばれるものを使って独自の技術開発を行い、現代日本とほぼほぼ変わらぬ物となつて今に至る。

それでもなんで、異世界が様変わりしてないかっていうと、転生者の我儘らしい。この中世ヨーロッパのような、発展途上な感じは崩したくないというなんとも言えない我儘。それと急な技術発展による異世界の混乱を招かないようにという意味もあるらしい。

それでも一部の技術は転生者が残した痕跡から漏れちゃって、一部は近代に近づいてしまつたらしいが。

兎にも角にも、こういったいきすぎた技術力は、転生者同士での使用に限って解放している、らしい。

「へえ〜。」

「いやへえ〜って。反応薄いな!? もうちよつとオーバーでレボリユーションな反応しなさいよ。」

戦兎さんが鋭い? ツツコミをしてくる、この人ノリいいな。

「ま、そういうこと。んで、このスマホの中にある掲示板、向こうの世界で言う掲示板がコレだ。転生者の為に作られたインターネット。略してTTTIだ!」

「今思ってたんですけど、マスターさんがいるのに話して良いんですか?」

「ああ、彼は気にする必要も無い。彼も転生者の1人なんだ。」

今まで静かにコーヒーを飲んでいた海東さんが説明してくれた。へえ、あの人も転生者だったんだ、とマスターを見ると、こつちを見てチャオ!と挨拶してくる。

「そしてこのカフェ「ナシタ」は、転生者達が集まる貴重な憩いの場だね。大抵は誰かがいるし、暇つぶしとリラックスには最適なんだ。コーヒーも美味しいしね。」

動き出した展開

さて、この王都に着いたからにはやる事が沢山ある。

まず、住居の確保。これについては、暫く安定した収入があるまで国が援助してくれるらしい。転生者様々だね。

次に職の確保。正直いって異世界にまで来て仕事をしたくない気持ちもある。けど、現代には無かった仕事についてみたい気持ちもある。魔術を活かした職である、魔術師がその最たる例だ。科学では証明出来ないような現象を起こせるらしい。

僕はまだこの身体が何を出来るのか分からないし、どんな能力があるのかも分からない。まずはそれを知る事が先決かな。

何が得意で、何が苦手か。自分を知って、受け入れて行きたいと思う。

そして最後に、この世界について知る事だ。転生者が介入し、科学による発展が続く中で、この世界は未だ神秘を保っている土地も少なくない。前世で言ういわゆる旅つてやつかな、そういうのもやってもいいかもしれない。

そういう事を話し合って、時間を過ごした。戦兔さんや、龍我さんとは色んな事を

教えてもらった。彼が転生した人の事について、彼の原点である仮面ライダービルドという作品について。

パンドラボックス？というものについては良くわからなかったけど、この異世界でも仮面ライダーとして愛と正義の為に、弱者を守っているらしい。

僕も彼等のように知っている作品のキャラクターであれば良かったのだが。

「おつ、もうこんな時間か。じゃあ俺達はそろそろ帰るよ。マーリンもこれから大変だろうけど頑張りな」

そう言つて、戦兎さん達はナシタを去つていった。

「それじゃ僕達もそろそろ行こうか。マスター、コーヒー美味しかったよ」

海東さんはマスターに一言言つてから立ち上がり、店を出た。僕も後についていく。

店を出て、外に出ると外が騒がしかった。怒鳴り声や叫び声、何かが割れる音も聞こえる。

覆面を付けた男が、銀行と描かれた店からドアを蹴破らんとする勢いで、袋を持って出てくる。

「おや、強盗のようだ。天下の王都でそんな事をするなんて、無謀にも程がある。」

男が通りを歩く人々を殴り飛ばしながら、こちらに走ってくる。

海東さんは落ち着いてますけど強盗はこっちに來てますよ!?

「うるせえ！どけ！ボケ共！」

男が僕らの方に走ってくる。

「そういえば、君にはちゃんと僕の能力……特典を見せた事は無かったね。よし、見せてあげよう。コレが僕の力さ。」

前を歩く海東さんと、強盗が5mも満たない距離に近づいた時、海東さんはクルクルと何処から取り出したのか、デイエンドのカードと青い銃を掲げる。

「変身」

<<<カメンライド>>>

<<<デイエンド！>>>

海東さんを中心にして、青い板状のものと赤青緑の影が集まってくる。

そうして、海東さんは仮面ライダーデイエンドに変身した。

TTTI内掲示板とあるスレ

54 : 名無しの転生者 ID : *****
 こちら偵察兵、ターゲット発見しましたどうぞ

55 : 名無しの怪盗 ID : *****

>>54

ありがとう、すぐそちらに向かうよ

56 : 名無しの転生者 ID : *****

新規転生者チャソ可愛いでござるww

57 : 名無しの転生者 ID : *****

きつしよ いつのオタクやねん

58 : 名無しの転生者 ID : *****

うはwwwあたりが強いでござるなwwカルシウムが足りておらんのでござらんか? wwwww

59 : 名無しの転生者 ID : *****

／／／／／このコメントは管理人によって削除されました。暴言は良くないゾ??

60： 名無しの転生者 ID：*****

サンキューシノノン

61： 名無しの転生者 ID：*****

サンキュータバツネ

62： 名無しの転生者 ID：*****

呼び方統一しろお前ら

63： 名無しの転生者 ID：*****

ウオウフｗｗｗｗ少々煽り過ぎたでござるなｗｗｗｗ失敬失敬ｗｗｗｗ

しかし新しいオニヤニヨコモまたメチャカワユイでござるなｗｗｗｗうーんこれは俺

の嫁！w

64： 名無しの転生者 ID：*****

また変わったタイプの容姿してんなー、なんだアレ、Fate系か？

65： 名無しの転生者 ID：*****

容姿からして、人外が混ざってるのは間違いないでござるな。本人がそうなのか、

ハーフなのか。どちらにしる海東氏や強力なメンツの誰かが行くしかないでござるよ

66 : 名無しの転生者 ID : *****
 うわあ!急に正気に戻るな!

67 : 名無しの転生者 ID : *****
 一応、変身した状態で行こうかな。どんな人物なのか分からないしね

68 : 名無しの転生者 ID : *****

外見と内面が一致しないのは転生者の基本だから、どんなに儂い容姿でも警戒はして
 おいた方がいいよね。

69 : 名無しの転生者 ID : *****

97 : 名無しの転生者 ID : *****
 よかった、想定よりマトモそうで

98 : 名無しの転生者 ID : *****
 分からなくて、とんでもない爆弾抱えてるかも

99 : 名無しの転生者 ID : *****

まさかそんな、頼光ママの時じゃないんだから（汗）

100： 名無しの転生者 ID：*****

本人に問題が無くても転生した身体の方に何かあったらバグることもあるみたいだし

>>99

嫌な…： 事件だったね…

101： 名無しの怪盗 ID：*****

こちら海東、転生者受付に着いたよ。今手続きを行ってる。会話してみたけど、普通の子だったよ。ただ性転換しちやっただけ

102： 名無しの転生者 ID：*****

受付さん h s h s

103： 名無しの転生者 ID：*****

受付さん h s h s

104： 名無しの転生者 ID：*****

お前ら気持ち悪いよ…

105： 名無しの転生者 ID：*****

あーTSっ娘か、大変やな

106： 名無しの転生者 ID：*****

オウフ、オニヤニヨコはオトコノコでござったか。だがそれもヨシ！w

107： 名無しの転生者 ID：*****

ともかくとして、問題はなさそう？

108： 名無しの怪盗 ID：*****

会話した感じは問題無さそうかな。しばらく付き添って、様子を見てみるよ。

109： 名無しの転生者 ID：*****

はいそれじゃあ解散！閉廷！君達もう帰って良いよ

110： 名無しの転生者 ID：*****

なんでホモが湧いてるんですかね…

111： 名無しの転生者 ID：*****

ナシタはマスターがバチボコに強いから安心して預けられるわあ

エポルトオオオオオオ

112： 名無しの転生者 ID：*****

中身違うってそれー

113： 名無しの転生者 ID：*****

仮面ライダー系とかカタログスペックだけみたらチート級なんだよなあ…俺も

そつちにすりや良かつたかな

114： 名無しの転生者 I D：*****

万華鏡写輪眼ですねぇ！

115： 名無しの転生者 I D：*****

大概チートだろ

この後身内同士の雑談レスが続く――

不穩の影

海東さんは仮面ライダーデイエンドに変身した。青いフォルムと、バーコードのような網線状がついた身体。だけど何処か奇怪で、けれど男の子の心を攪るヒーローそのものだ。

「貴様その力、転生者だな！ちようどいい、ここでゴミを処理してやるー！」

海東さんの変身を見て驚き、立ち止まった強盗はそう言つて、手に持っていた杖のよなものを此方に向ける

「ファイアボール！」

強盗の杖先から、拳大の大きさの炎の塊が放たれた。海東さんは少し驚いた様子だったが、何処か納得したらしい。

「なるほど、魔術師か。それにさっきの口ぶり、没落貴族かな？」

すると強盗は我慢ならんといった様子で大声を出す

「黙れ！よその世界からやつて来た寄生虫のウジムシ共が！貴様らさえ居なければ、我らは栄華を続けられていたのだ！」

海東さんは手を軽く払うだけで炎を塊を打ち消すと、強盗を見て軽く呆れたように

「やれやれ、責任転嫁も甚だしいね。大方、不正や横領なんかで没落したんだろう。ともかく君には、大人しくしててもらおう。」

海東さんはそういうと突如高速移動をし始めた（自分でも何を言っているのか分からない）

分らないが突如として高速移動を行い、強盗の腹に滑り込むようにして持っていた銃を押し当てた

強盗は驚く暇もなく

「少しだけ痛いよ」

乾いた銃声と共に強盗が弾け飛ぶようにして跳ねた。

衝撃を受けた強盗は、しばらく道を跳ねた後、ピクリとも動かなくなった。

「一件落着、つと」

「……あれ死んでませんか？」

「大丈夫大丈夫、死にはしないよ」

海東さんはドライな口調でそう言った。

「ふう、兎も角。これで……うあ……!？」

海東さんが変身を解除しようとしたその時、急に頭を抑えて苦しみだした

「海東さん!?!大丈夫ですか!?!」

僕は海東さんに近寄ったが、頭を抑えたまま、呻くばかりで何がどうなっているのか分からない

「うぐつ……!?グア……！なんだ、この……！これは……!!」

「海東さん!!」

「……!!」

海東さんは突如として頭を押さえるのをやめて、呆然と立ち尽くした。まるで何かを抜け落ちてしまったように。

「か、海東さん……？」

「マーリン君」

突然話しかけられたボクは、ちよつとビツクリして肩が跳ねてしまった。その声は、いつもより暗く、雰囲気か幾分か違っていて

「その杖、君が持つてるそのお宝を、僕に渡してもらえるかな？」

突如として海東さんがボクに向けて構えた銃の意味も、その言葉の意味も、何を言っているのか理解できなかつた。

邂逅に次ぐ邂逅

プロトマーリン（以下、プーリン）は、異世界に来て初めて愕然とした。転生して以来（といつても一日も経っていないが）、一定の安心感と心地よさ、一種の抱擁力を感じていた海東に、突如として銃を向けられたからである。

さながら、頭を硬いもので殴られたかのような衝撃であった。

プーリンは海東の凶行に対し、動揺と不安感、そして何故、という疑問をない混ぜにした気持ちを思いながら、海東に理由を問う事にした

「か、海東さん？辞めてくださいよ、そんな、冗談なんて」

「冗談だつて？面白い事を言うね。僕は世界をまたにかける怪盗だぜ？当然の行動だろう？」

プーリンは、今さっきまで会話していた優しい海東と、目の前にいる怪盗を自称する海東が、同一人物だとは到底考えられなかった。

さっきまでの海東は転生者として先輩で、転生したばかりの自分に配慮してくれたり、他の転生者と引き合わせてくれたり、お節介な優しい人であった。

だが、この今自分に銃を向け、冷酷に自身の欲を満たそうとする人物は誰だ？

それとも、本性を現しただけ？ また自分は騙されるのか？ また、自分は――

そこまで考えたところで何人かの走る足音が近づいてきた。それとともに、海東が呆れた様子で話す

「どうやら、邪魔者が現れたみたいだ。運が良いみたいだね？ マーリン君」

「――えっ？」

「私達は王都警備隊だ！ 強盗の通報を…… 待て！ 海東、何をしている！」

動揺と不安が広がる場に、鋭い声が介入する。

赤いレジャージャケットを見に纏い、炎を連想させる柄と、全身赤で揃えた服装、鋭い眼光。

異世界に不釣り合いで、時代錯誤のUSBメモリのような物を持った男が飛び出した後、それに続いて男女数名が現れた。

男の問い掛けに海東は肩をすくめた

「何をしているのか、だって？」

僕は通りすがりの怪盗さ。欲しいものは、手に入れる。どんな手を使ってもね」

その海東の言葉に、男は愕然としながら、けれど鋭い眼光は消えず「ツ！お前はそんなやつじゃなかっただろう！」

男は大きな剣のような物を構えながら、以前との印象から豹変した海東を警戒する
海東はどこか飄々としながら

「欲しいものは手に入れる。これが僕の矜持でね」

海東は腰のカードホルダーからカードを抜き出し

「なら、こいつらの出番かな」

クルクルと器用に回転させたデイエンドライバーに、カードを挿入した

<<<カメンライド>>>

<<<クローズ！>>>

<<<マツハ！>>>

「行つてらっしゃい」

海東によつて召喚された、本来なら邂逅しえない2人の仮面の戦士が、彼らの前に立ちただかつた

戦闘

海東・プーリンの間に立ち塞がった仮面の戦士達はどこか上の空で、空洞のような印象を受ける。

彼らを前にした赤い男は真紅のガイアメモリを掲げ

<<<アクセル!>>>

「変……身!」

ハンドルを模したベルトにメモリを挿し、右手側のハンドルを回すと、男が赤い外套に包まれた。

何処からかエンジンの音が聞こえ、熱を放出しながらプラズマと共に男を包む。

熱が晴れるとそこには、頭部に大きなAの文字のような角を持ち、複眼状の青いモノアイをした、何処かバイクに似た赤い仮面ライダー、アクセルが現れた。

「さあ……振り切るぜ!」

新たに増えた真紅の衣を纏った男は、プーリンを救い出すためか、現場を収めるため

か、海東を正気に戻すためか。無垢な目の前に立ちただかる仮面の男達に、持っていた剣を振り上げ突っ込んでいく。

そんな男に、遅れてやってきた男女数名、その先頭にいた赤い髪をポニーテールにした女性が大声で呼びかける

「照井さん！」

「俺はこいつらの相手をする！アリーゼ達は海東を抑えろ！」

「了解です！」

だ
照井という名前らしい男の呼びかけに、仲間であろう彼らは海東を瞬く間に囲み込

んだ。そんな彼らを見て海東は表情は見えないが、彼らに引き摺られる様にして離れていく。呆けたままのプーリンを、呆れた様子で見ながら

「おいおい、相手を間違えてないかな？君達が捕まえにきたのは、あそこでのびてる強盗犯であって、僕では無いだろう？」

警備隊の内の1人が、武器を構えて警戒しながら答える。

「仲間に見張らしているから大丈夫だ。それに現時点で一番危険なのはお前だ。お前の無実が証明されるまで、拘束させてもらう！」

そう言った男と数名の男女が、一斉にそれぞれの武器を持って飛びかかった

赤いポニーテールのアリーゼという女性は、そんな仲間達を見て慌てて止めようとする

「わわ、みんな待つて！貴方達じゃ——」

彼らが飛びかかろうとした瞬間、ほんの僅かな時間の間に、海東はカードケースからカードを取り出し、デイエンドライバーに挿入した

<<アタックライド ブラスト>>

そんな機械的な音声がすると同時に閃光が彼らを中心に弾けた。それと同時にネットに弾かれたテニスボールの様に、警備隊の彼らは吹き飛んだ

「ああっ!?!みんな!?!」

アリーゼが悲鳴を上げるとともに剣を構え

「【アガリス・アルヴェシンス】」

彼女は小さな声で、しかし一瞬の内に何事かを呟くと、剣とブーツから炎が迸り包み込んだ

猛然と海東に突っ込んでいくアリーゼの剣は、海東の持つデイエンドライバーの銃身

によつて受け止められる

海東さんと女の人の激しい攻防戦が始まった。女の人は海東さんが撃つた銃弾を避けたりせずに、剣で受け止めたり、弾いたりしている。街や逃げ遅れた野次馬を庇いながら戦っているようだ。

もちろんボクも庇われてしまっている。こんな近くで尻もちをついたまま座り込んでいる暇はない。でも海東さんが、こんな風になつてしまったのは何故なのか。

止められなかったのか、前兆はなかったのか。何故、気づけなかったのか——

今ここで彼らに任せて逃げたら、ボクはそれを知らないまま終わつてしまう気がする。海東さんとの仲が、ここで終わつてしまう気がする。今までの恩を、返せないまま。ボクは持つていた杖を支えに、立ち上がった

アクセルが腰につけたベルトのグリップを握り、右のハンドルを何度も捻る。全身が

熱と煙に包まれた。マツハとクローズの攻撃を弾き、体勢を崩す。

<<<アクセル マキシマムドライブ!>>>

「ハアアアア…！」

アクセルが熱を放出しながら2人に突っ込み、後ろ回し蹴りを叩き込む。後には赤いタイヤ痕が刻まれ、消えていく

「セヤアアアアアアア！」

必殺技を刻まれたマツハとクローズは、威力に耐えきれず、膝をつき形を保てなくなった様に消えた

「絶望が、お前のゴールだ。……アリーゼ！」

アクセルは残心の後、海東と、街を守りながらの為苦戦しているアリーゼの方に向かった

周りに倒れている仲間たちを見て照井は

「お前ら! …… 功を焦ったか！」

彼らが傷ついたことに深い憤りを感じながら、しかしそれを内に抑え込み、かつての同郷の仲間を正気に戻そうと海東とアリーゼの戦闘に向かう照井

しかしそんな彼らの戦いに、割り込む影があった。

「せえええええい！」

プーリンはせめぎ合っていた海東の死角に回り込み、勢い良く手に持っていた杖を、海東の後頭部にその膂力を持って叩き込んだ

「なんツ!?!グワア!?!」

後頭部に強い（しかも人外の腕力）衝撃を受けた海東ことデイエンドは、ふらつとした後、前のめりに倒れ込んだ。

誰が彼を奪ったのか

人混みが場を囲む。何者かによつて荒らされた王都の一画、その道路には一般人が侵入し、場を荒らさないように立ち入り禁止のテープが巻かれている。

いわゆる事件現場の中には、我らが小説の主人公——最近影が薄いような気がしてならない——自分の事をプロトマリーンドと思ひ込んでいる一般エルフことプーリンと、赤いレザージャケットを着込んだハードボイルド、照井竜。それと側に助手の様に立っているアリーゼ・ローヴェルがいた。

彼らの周辺は青いブルーシート状のもので囲まれており、さらにその外を何かしら作業をしているのか、忙しなく人が動いていた。

さながらキャンプのようであるが、雰囲気は重々しく到底そのような冗談を言っている場合ではなかった。

彼らの雰囲気重くしている原因、それは、目の前で鉄状の縄で拘束された海東大樹という名の転生者が原因である。

「……君の話を聞くに、海東が強盗を気絶させた後、突然呻いて頭を抑えたと思ったら、暴れ出した、と。」

「はい、そんなんです。……まるで人が変わってしまったかのように。」

照井が状況を咀嚼するようにふむ、と相槌を打つ。

「俺の海東の印象を言うに、とてもそんな事をするような青年には見えなかった。仕事柄他の転生者達にはあまり会えないが、以前会った時話しただけでも、他人を害するよ
うな人間では無かったはずだ。」

「私もそう思います。彼は一般市民を守る、正義の味方の仮面ライダーでした。そんな
ことをするようにはとても……」

照井が気絶している海東を見て話す。

照井の言葉に、アリーゼも続けてそんなことを言う。プーリンも当然同意見であつ
た。

まだ会って1日と経っていないが、ここまで彼を見ていて、とても平気で他人を害す
る人間だとは思えなかった。

プーリンはここで、一つ伝え忘れていたことを思い出した

「そうだ、海東さん、変な事を言っていました。僕の杖を『お宝』と呼んで、奪おうとして
たんです。」

「何？お宝だと……？その杖に対して言ったのか？」

照井が訝しみながら問い返す。ここで照井は、前世の記憶に引つかかった。この、目

の前にいる青年の身体の本来の持ち主、原作；仮面ライダーデイケイド

に出てくる、海東大樹その人についてだ。

彼は確か、自分の欲しいものに対して、『お宝』と、そう確かに言っていたはず。彼にとつてお宝が欲しいものなのか、欲しいものをお宝と呼ぶのかは定かでは無いが、確かそうだった、と。

しかし照井は辿り着いた結論を空想だと決めつけ、記憶の内から葬った。

「とにかく、海東が起きるのを待とう。治療師に診てもらって、大事な事は分かっている。こんな格好で彼には悪いが、治療院で暴れてもらっても困る。下に布をひいているだけ感謝してもらいたい」

「それに治療院は今、俺たちの部下が搬送されている。シスター・クレアにこれ以上の負担はかけられん。」

ボクの目の前には縛られながら眠っている海東さんと、照井さん、そしてアリーゼさんがいる。照井さん達は、ボクや海東さんと同じ転生者らしい。

海東さんは突然人が変わってしまった。以前はそうではなかったらしい。海東さんの、以前との違いはなんだ？何が起こった？誰に何をされた？

誰と関わった？

嫌な考えに行き着いてしまう。自己嫌悪はボクの専売特許だったか、と思わず悩んでしまうほどにだ。

アリーゼさんに、あまり無茶はしないように、と注意された。アリーゼさんと海東さんが競り合っている間に、死角を突いて海東さんの頭をぶん殴ったことについて咎められた。

アリーゼさんは危険だからと、ボクに対して注意し、そして怪我が無くてよかった。と、ボクを心配してくれた。その言葉が心の底から言っているのだということを、理解できる。

ああ、優しい人だ。初対面の、関係の無いボクを、本気で心配してくれている。

自分はなんと情けない人間なのだろう。海東さんを変えてしまった。アリーゼさん達を心配させてしまった。自分はなんと不出来で、情けなくて、不器用な、人間なのだろうか。

せつかく異世界に来て、これまでとは違う自分になれたというのに。

そんな鬱屈な自己嫌悪に陥っていたボクは、海東さんの呻く声で、考えていた事を掻き消された。

誇り高き転生者はなにを思うのか

「ウツ…… ココア……」

海東が身を捻ろうとし、しかし身体が縛られているため出来ない様子を見ながら、プーリンが問いかける

「貴方は、誰ですか……？」

「僕……？僕は、海東さ……。やあ、プーリン君……。いてて……頭が痛いし、記憶が曖昧なんだが、何がどうなっているんだ、これは……」

そう答える海東は、プーリンに銃を向けていた時の刺々しい雰囲気は無く、まるで別人のようであった。

「人格が、戻っている……？性格が変わったと言うべきか？それとも本当に……？」

照井が海東の様子を見ながら考え巡らす。今の海東は、自分達が対峙したその時とは違い、穏やかなのである。頭に強い衝撃が加えられた事による回復なのか、一度倒されると元に戻るのか、それともそれ以外の要因が……

「海東さん、貴方は街中で突如として暴れ出し、負傷者を生み出しました。貴方の身に何があったのかは置いておいて、ひとまず警備本部までの御同行を願います。」

アリーゼが海東へ、これからの処遇などの話をしていた

ここで一つ余談ではあるが、転生者には優遇措置がなされている。街中での買物物の割引や、優待券、優先的予約などもあるが、中には法律の罰則緩和なども含まれており、これは異世界の人々から不満の声が挙げられている。

「すまない……何も覚えていないけれど、何かしてしまつたのなら、その罪を償おう。」
「それに、貴女。貴女にも被害者の一人として、御同行願えますか？」

プーリン達は、照井達に連れられて警備本部と呼ばれる場所まで運ばれた。白いレンガで作られた、一見無機質に見えるが古めかしくも威厳を感じさせる建物であった。その建物は王都において中心部である王城、その側に位置している。付近には物々しい雰

囲気が蔓延しており、黒い軍服のようなものを着た人々が忙しそうに出入りしていた。その建物の中に案内されたプーリンは、一通りの事情説明などをした後は解放され、自由にされた。

照井もアリーゼも仕事や後始末の処理があるからといなくなってしまうたし、海東は何処その尋問室に連れられてしまった。

プーリン、この時異世界に来て初めて感じる孤独感であった。

1人ぼつんと取り残される事になったプーリン。

辺りから様々な声が聴こえてくる。

「アンタガ、アンタガワルインダヨ！……」

「この辺にい、うまいラーメン屋の……」

「(首の折れる音)……」

「ーだから売りに戻る必要があったん……」

「夜は焼き……」

飛ばされてから今さつきまで海東さんが居たし、などと考えながら待合室のような所にあつた長椅子に座りながら、考え事をする。周りから不思議なものや珍しいものを見る目で見られていたが、

孤独感に苛まれるプーリンは気付かなかった。

およそ15分ほどして、彼女に掛けられる声。

「やあ、君。どうかしたの？迷子かな？」

「あつ、すいません…… 何でもないです…… 大丈夫です。はい……」

実の所プーリンは何でもなくは無く、とてつもないピンチである。時刻は現代に換算しておよそ14時程。泊まる宿も予約してないし、手引きしてくれたはずであろう海東は連れて行かれてしまった。

照井やアリーゼ、桐生戦兔や万丈達は何処にいるのか分からないし、転生者じゃない人にして現地に知り合いはいない。

なんなら予約できたとしても金はなく、地理的な土地勘もない。詰みであった。プラ
ND、いわゆるピンチである。

「急に話しかけてごめんね、さっきから悩んでたみたいだから、心配になっちゃって。」
その人物はあつけらかんとした態度でプーリンに話し続けた。

「実は何の下心もなく話しかけた訳でもないんだよね、お呼ばれしちゃってさ。Fat
e 作品系列の女の子っぽい子が転生して来たから、相手してお世話してあげてって言
われたんだ。」

「俺の名前は立香。藤丸立香だよ」

Mに手を出すな／転生者の集い

警備本部の某所で、プーリンと藤丸立香が顔合わせをしている頃。

同じく警備本部の別の場所、所謂尋問室といったところで。机を挟み向かい合って座っている、

2人の男が邂逅を果たしていた。

「気分はどうだ？海東。」

「……とても、良いとは言えないね。」

1人は拘束を外され、それでも尚少し表情に暗い影を落としている、海東大樹。

そしてもう1人は、黒いスーツとそれに不釣り合いな派手なマゼンタ色のインナーシャツを着た男。首からはこれまた同じくマゼンタ色のチエキを掛けている。

「お前らしくもない。力を振りかざして暴れるとはな。今更、ロールプレイとやらでもする気にならなかつたのか？」

そう言つてマゼンタ男はするりと椅子に腰掛け、チエキを弄り出す。

パシヤリ、と一枚海東に向けて写真を撮った。

現像された写真は、全体的に輪郭がボヤけ、何も写さない。

人によつてはヘタクソと暴言を吐くであろう程酷い写真だった。

「……一言、せめて何か言つてから撮つてくれたまえよ。」

「いや何、急にコイツを触りたくなつただけだ。他意はない。」

和やかに思える会話を2人が行つてしていると、マジックミラーを通して此方を見ているであろう人物からマイク越しに声が聞こえた。

『門矢土くん。我々は君を彼と世間話をさせに呼んだわけでは無いんだ。』

「分かつた分かつた。煩い奴め。俺に任せておけ。」

そうマゼンタの男が言うと、マイクの向こうで歯軋りのような苛ついているような雰
囲気が伝わってきたが、それきり声は聴こえなくなつた。

「海東、本題に入ろう。事件については照井達から話を聞いてほしい分かつた。だが、
一つ気になる点があつた。」

マゼンタの男は行儀悪く脚を組み、海東に向き合う。そして重々しい語り口で話す
「性格が、いや、人格そのものが変わったように見えた、と。まるで……原作の
海東大樹のように。」

「原作の……？」

海東は逡巡する。原作の海東といえば……自身が望んでその特典を貰つ

たにしろー！ー！ー！ー！ー！ー！あまり褒められたキャラクターではない。

自身の（嫉妬）欲の為に敵の親玉のロボットに乗り込んで操ったり、喧嘩をふっかけて物を盗んだりなど。（※個人の意見です）

正義の仮面ライダーとして活動する事もあるにしても、裏表の激しい人物だった。

「お前の人格が変わった事には、何か理由があるはずだ。それも決定的なナニかが。直前までお前、ー！ー！ー！ー！ー！何してた？」

海東は記憶を思い出す、確か新しい転生者の案内をしていたはずだ。

「……プーリン君。新しい転生者の、性転換してしまった彼の、案内をしていた。異世界のね。」

「噂に聞く、神が新しく送り出したという転生者か。掲示板も賑わっていたぞ、お前が女を引っ掛けようとしてるってな。」

「僕は善意でだな』ともかく、そいつに自覚があるにしろ無いにしろ、何かしら関係があるのには間違いない。』」

「行くぞ。ー！ー！ー！そいつの所へ、な」

そう言つて2人は立ち上がった。

一方他所

プーリンは

「へえ、ついさつきこつちに来たんだ。何処となくマーリンに似てるね。知り合いにいるんだ、そういう奴がさ。白くてふわふわしてるんだけど、悪い奴じゃないんだ。あつそうだ、F a t e っ て 知 っ て る かな。俺が呼ばれたっことはそう……」

「そ、そうですかね……へへえ……」

コミュ強の化け物に苦しめられていた

世界の破壊者

初邂逅はともかく、プーリンは藤丸と出逢い、様々な話をした。死んだこと、神様のご好意で転生したこと。海東のこと。

藤丸はあまり他人と会話をすることが得意ではないプーリンのたどたどしい話し口も、嫌な顔一つせず優しく、たまに相槌を挟みながら聞いていた。

そうして自身の今までのことをまとめてみて、改めてプーリンは自身のアイデンティティについて考えた。

この身はかつての前世における自身のものではない。プロト・マーリンと呼ばれる他の世界の住人の身体を受け、転生したことは、彼女の心のどこかに引つかかっていた。「……この世界に来て、考えてたんです、ボク。自分は何がしたいんだろうって。テンプレみたいに転生して、今ここにいますけど……本当は死んでた方が良かったんじゃないかって。」

突如として死に、現代に生きる希望や将来の目標をもていかなかったまま死んだプーリンは、異世界でもうだつの上がない生活をしなくてはならないのかと考えた。

「そういうネガティブなのは良くないなあ。俺が転生してきた時なんて、生きててラッ

キー、くらいの感覚だったよ。転生仲間もいたしね。」

「それはちよつと軽すぎじゃあないですか……」

「いやいや、大事だよ。宝くじに当たった、くらいの感覚でさ。目標なんて、今日明日みつかれるものじゃないんだから、気楽にいこうよ。」

藤丸は、プーリンがここまで思い悩んでいるのは、単に彼女自身の性格にあるのではないか、と感じた

「それに、海東さんがおかしくなったのも自分のせいかもしれないし……海東さんが暴れた時も、動けなかったし……変わるなんておおみえきつといてやっぱりボクは……」
「うーん、ジメジメしてるなあ。」

藤丸はあはは、と苦笑いを浮かべながら、プーリンの独白を聞き流した。

「まあ兎も角さ、海東も言ってたと思うけど。彼はそう言う人だったしね。」

…… 僕達先輩転生者が相談に乗るから、どうしても思い悩んだら言つてよ。」

こう見えて、人生経験豊富なんだぜ？と、胸を張つてドヤ顔を浮かべる藤丸。心なしか気軽な言葉の裏には暗く重く苦しい経験談があるような気がしたが、深くは聴かないようにした。

しかし、プーリンはそんな軽い調子の藤丸を見て、少しだけ笑みを浮かべた。

そんな他愛も無い話をしている2人。そこに二つの足音が近づいてきた。

プーリン達はその音に気付き、そちらに振り返ると、見知った顔が見えた。

マゼンタの男…… 門矢士と、海東大樹だ。

まず海東が前に進み出でて、プーリンに向き合った。

「やあ、久しぶりだね、プーリン君…… 改めて、先程はすまなかつた。」

海東が重い口調で口を開く。

「いや、そんな…… ボクは大丈夫でしたし、海東さんは正気じゃありませんでしたから。気にしなくて良いんですよ。」

「そう言ってもらえると助かるよ…… そうだ、その事で話が『その話は俺から説明する』…… 本当に僕の話の話を遮るのが好きだね、士。」

2人の間に柔らかない雰囲気に戻り、安堵も東の間。門矢士が口を開いた。

「まずは初めまして、とでも言っておこうか。俺の名前は門矢士。通りすがりの仮面ラ

イダー…… 世界の破壊者、とも言われる、仮面ライダーディケイド。の、力を持ったただの転生者だ。覚えておけ。」

「は、はい。ボク…… 私はプロト・マーリン、だそうです。まだ実感は湧きませんが、そう、らしいです。」

「そっちの藤丸と、海東は昔馴染みだから紹介は必要ない。」

最後の辺りに感じる何か決め台詞のような強い語気に少し圧倒されながらも、なんとかプーリンは返事をした。しかしこの男が自身のところへ来た理由。やはり例の件だろう。

「まあ、想像はついてるだろうが。俺が今回来たのは、お前の様子を見る為だ。海東がおかしくなった理由がお前にあると見て、お前に接触したのさ。」

やっぱり、とプーリンは思った。彼も自分が怪しいと思ったのだろう。海東がおかしくなる直前まで一緒にいたのが、転生したてで転生特典の扱いもなっちゃいない、精神的にまともかどうかも分からない奴なのだから当たり前だ。

「お前は今非常に危うい。力の扱い方も分からない。どんな能力があるのかも分からない。本人すら把握出来ていないんだから、俺たちは尚更だ。」

門矢士はスマホを取り出して、こちらに黒い画面を向ける

「ネットじゃあ、危険因子は早めに刈り取っちゃおうなんていう奴も一部いた。」

「ッ」

「なんだって!？」

「……」

門矢士以外の三者三様の反応が返ってくる。

プーリンは驚愕に言葉も発せず

海東はそんな話聞いちゃいないぞと声を荒げ

藤丸は知っていた様子で事態を見守った

「その声を荒げるな。そんな過激なことを言う連中はほんの一部だ。

前回のことがあって、現地民との軋轢が起こった。多少の不利益も被った奴もいたし、そうでなくとも居心地が悪いってのは良いもんじゃ無い。転生者は目立つからな。一目で分かる。ピリピリしてるわけだ。」

門矢士は飄々とした様子で、しかし視線だけは強く、そして疑いの冷酷な視線はしっかりとプーリンを見据えていた。

プーリンはそこまで事態が深刻化しているとは思わなかった。というより、情報の伝達^がが早すぎた。

「ボクはどうすれば良いですか……？」

「取り敢えず、俺と来てもらおうぞ。」

「もろもろの検査を受けて、原因を突き止める。お前に何の罪もないと分かったら、晴れて無罪放免だ。お前も俺も、こんな面倒なことは一度だけで良いんでな。」

そんな事を言った門矢士は、背後に銀のオーロラカーテンのようなものを出現させた。

「こんなタクシーみたいな扱いは、二度とごめんだ」

海東、藤丸を含む4人が銀のオーロラに飲み込まれ、警備本部のとある待合室は、再び静寂に包まれた。

飛ばされた先は

銀色のカーテンに包まれたプーリン達は、すぐに視界を取り戻した。

そこを一言で表すなら荒れた研究室といったところだろうか。

怪しげな、なんのどのようなことを意味しているのかすら分からない文字列を表示しているモニター。青白い光を発光する筒状の水槽と、中に入っている謎の怪物。その他の謎の管が繋がれた電子機器や実験器具、試験管が見られる。おおよそ研究室という言葉に当て嵌めるのが正しかった。

また、地面には何かしら書かれた紙の束や、開かれたまま跡のついてしまった本などが転がっていた。

暗くて周りは良く見えないが、人がいたという痕跡だけが残された場所だった。

「全く、呼び出して置いて良いご身分だな。」

士はため息を含みながらそう呟くと、プーリンに振り返った。

「まあ良い。お前、マーリンと言ったか。しばらくはここで暮らすことになるだろう、この施設の説明をしておく。」

この施設は転生者に開かれてる研究施設でな。まあ色々利権が絡んでるが、そこら辺

の難しいことは後から説明する。」

暗い部屋の中、勝手知ったると言わんばかりに士は部屋の出入り口の扉を開け、外に出た。

「3階建てに、地下もある。ここは地下3階の知り合いの研究室なんだが、今は外出してようだ。お前の部屋に案内する、ついて来い。」

—————

1階は受付、2階は飲食や遊戯、共同スペース、3階は住人の部屋、地下は研究施設。「あとここは王都の中央部の東側にある。周りにはコンビニやら雑貨屋やら、アニメ○トだのなんだの、転生者が好き勝手に開いた店があるから、暇つぶしには困らないだろう。お前が外に出れるならの話だな」

士は自室への道すがら、施設について色々説明してくれた。あそこの店のケーキが美味しいのだの、ナマコを食わせてくるのだの

海東達も連れ添って歩いたので、非常に目立った気がするが、事件の連続で疲労困憊だったプーリンは気付かなかった。

地下からエレベーターで上がっていけばすぐに部屋に行けるのだが、施設の説明も行っていた為に時間が掛かった。

自室に案内される頃には半ば眠っていたような状態であり、杖と藤丸に支えられなが

ら部屋のベッドに寝かされた。

プーリンは藤丸に声とも取れない声で藤丸達に礼を述べながら意識が暗転していくのだった。

そうしてプーリンの転生初日は、波乱に包まれながら終了した。

—————

部屋にプーリンを寝かしつけた門矢士、海東大樹、藤丸立香の3人は2階の飲食スペースに来ていた。

「話を聞くのは明日になってからだ。奴としては一刻も早く究明したいだろうが、間が悪い。」

「随分優しいじゃないか、士?」

「馬鹿言え、お前と違って俺達は何の影響も無かった。ならそう急くこともないだろう」
そう話している3人に近付いてくる足音。何処か軽い足取りで、スキップでもしてるんじゃないかと思うほど軽い。

その人物が話しかけてくる。

「やあやあご友人方!探したよ。」

遅くなってすまない、調べ物と知人への連絡をしていたんだ。例の彼女は何処に？」
「いうのであれば、モナ・リザ。イタリアの美術家、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた、世界でもっとも知られる美女の絵画。そこに描かれた彼女が、そのまま出てきたような女性だった。

「ダヴィンチちゃん！久しぶりー！」

「やあやあ、久しぶりだねえ藤丸くん。頼光ママの騒ぎ以来かなー」

藤丸が彼女の名を呼び、喜びを全身で伝えながら彼女を受け入れる。

彼女の名前はレオナルド・ダ・ヴィンチ。この研究施設における、実質的な所長と言っても良い人物であった。

スゴイジダイ動き出す世界

研究施設の地下。一般的には会議室と呼ばれるである場所に男女数名が集まり、暗い部屋で表示されている大画面を瞳に映していた。

「……………って事で、コレが彼女の身体とか、持っていた物の正体ってことで満足して頂けたかな？」

「……… 大体わかった」

話は3日前に遡る……………

門矢士達は飲食スペースでダヴィンチに会った後、プーリンに対し検査を行わせて欲しいと打診された。

本人の同意も無しに行うというのは転移者としての人權に関わるとしてその日その場では保留され、プーリン本人が起きて同意が取れ次第行う、という方向性で話は纏った。

の、だが。

2日が経過した時点で、プーリンは目覚めなかった。身体に異常は無く、原因は不明。

多くの魔力を急激に失った時になるマインドダウン、単に緊張から解き放たれたことによる過眠。などと様々な意見が出た。

これを聞いたダヴィンチや、その他の研究者らが検査の前倒しを提案した。士達は致し方無し、ただし危険が伴うものはナシで。という条件の元、精密検査が実施された。

すると、驚くべき事実が発覚した。

彼女の所持していた杖から、強力な神性と、それを元とする怪電波のようなものが発せられていたことがわかったのである。

杖はプーリンの身体の魔力と強く繋がっており、彼女の魔力を強制的に引き出すことで強力な電波を発していた。

つまるところプーリンは、異世界に怪電波を垂れ流すルーター、もしくは中継器の役割を担っていたのである。

そして問題となったのがこの怪電波だった。

現地の人々には何の害もない、無害なものであるのだが、転生者にのみ効果があるようなものだった。

その効果とは、思考が曲解される、もしくは人格が植え付けられ他人にされてしまうというものだった。

もつと詳しく解説すると、より原作に近い人格にされてしまう、という恐ろしい代物だったのだ。

海東が突然暴れ出したのは、その影響を受けてのものであり。

杖を欲しがったのは、怪電波を垂れ流していたことと深く繋がりがあるのかもしれない

い。

ダヴィンチ達が検査を急いだのには理由が有った。

プーリンが検査を行った日のちようど前日。

――――警備本部が何者かによつて襲撃を受けたのである。

巨大な火の玉が建物を包み込んだかと思うと、淡い青色の怪物が発生させたという斬撃によつて警備隊は吹き飛んだという。

何処からか、いつの間にか侵入した青い怪物によつて建物は被害が甚大になった。

幸いにも転生者らの奮戦と必死の救助により、死者は出なかつたものの。一時王都警備隊のおおよそは活動不能となつてしまった。

コレを重く見た国王は、王都中央部を守護する国王直属の近衛隊を派遣し、王都警備隊と連携して王都を警備させることを決定。即座に動いた。

警備隊の活動不能を知り、犯罪の活発化を憂慮した、というのが公式発表だった。

犯行の男は現在も逃走中であるらしい。

目撃者達の証言、そしてその場に居合わせた転生者達の証言を合わせると、怪しげな紅い目をしたニンジャのような男だった、とのこと。原作はどこか、何処の誰なのか、能力は何なのかは鋭利捜査中である、とのこと。

事件現場には怪しげな連中が何人も散見されたことから、個人の犯行では無く計画的な犯行であることが分かった。

そして彼らの襲撃の後、牢屋で遺体が発見された。

死亡時刻はちょうど表で怪物が暴れていた時間帯。胸を何か太いもので貫かれたのが死因とされるのが、海東達に襲い掛かり撃退された貴族派の強盗だった。

オオンアオン（咽び泣き）

目が醒めた。

深く沈んでいた意識が、海中から顔を出すように浮かび上がる。

自分が一体何者で、何処の誰なのか。

夢に浸っていた意識は、醒めてすぐだと、それすらもハッキリと理解出来なかった。

朧げに目を開くと、暗闇が写る。

段々と目が慣れてきたから、天井が見えてきた。

外の感じからして、今はまだ6時ほどだろうか。

年が明けてまだ少しといった感じだし、冬もまだまだ真っ盛りだから、6時でも暗闇なのは当然の帰結だろう。

学校に行く時間にしてはまだ早いし、もう少し眠ろう。

.....
なんだか悪い夢を見ていた気がする。自分が死んで、神様に会って、エ

ルフの、それも綺麗な女の子になってしまふ夢。

夢でよかった。今日もいつものように、学校に行き、そこそこの仲の良い友人と趣味のことで駄弁つて、放課後に本屋に寄って新刊が無いか確認し、家に帰って、暖かい食事と風呂にありつく。

当然の日常を当然のものとして享受するだけだ。

そう思った。思いながら、身体の向きを変えようと横を向くと、見慣れない白いものが目に写った。

ああ 嘘だ、そんな。夢の筈じゃあーーーーー

これは確かに自分自身の身体の一部であると認めるのに、少々の時間を有した。

自分の置かれている現状を思い出した。いつまでも夢に浸っていられるものでもない。

自分はいつの間にか着替えさせられていたパジャマ（モコモコしていて触り心地が良い。女の子っぽい点に目を瞑れば）から、綺麗に洗濯されたのだろう、元の衣装に着替えて、パーカーを深く被りながら部屋を出た。

ここは、研究施設。多くの転生者や、研究者の詰める、この国の最重要施設の一つだ。そんな所に海東さん達に連れて行かれた事を思い出しながら、ボクは2階にあるという飲食スペースにやってきた。

身体が空腹を訴えているからだ。ダジャレではない。

パツと見て、フードコートという感じだ。大型商業施設とかにある感じの。ラーメン屋とかイタリアン料理店とか、北海道の具材を使ったとかを謳い文句にする店が詰められたフードコートに似ている。

異世界特有の居酒屋だとか荒くれ者の集う飲み屋とかそういう感じを想像していたが、やはり転生者にしても生まれ育ち、慣れた物の方が良いのだろうか。

考察というにはお粗末な思考をしながら、ふと自分はお金を持っていない事に気づいた。

一文無しな自分と空腹を訴える身体に絶望感を感じながら、同じく転生者であろうと見受けられる男性が、何やらカードを店員に見せていることに気づいた。

すると金銭を介していないのにも関わらず、食事の引換券を貰っているではないか。

そう、ボクは見たことがあるあのカードを。転生者証明カードみたいな奴。記憶は臍げだが確かに持っていた筈。

そして自分は今それを持ってきている。神か。過去の自分の偉業を称えながら、密かに目を付けていたうどん屋の前に行き、カードを見せつけた。さながらどこぞの御隠居様のように。

身体に力（リキ）を込め、鼻から息を吸い、大きな声で宣言する。

「カレーうどん、一つお願いします!!」

「先程のお客様に出したのがラストになります」